

I 研究主題

子どもが輝く学びの創造

～子どもの思いを引き出し 実現に向けて思考する子の育成～

II 主題設定の理由

1 現代的な課題から

社会の国際化・情報化が進行したことによって、人々の価値観や生き方が多様化し、子どもを取り巻く環境は急激な変化を続けている。その中で、SNSなどのインターネット上で自分の思いや価値観を表現することが多くなっている。しかし、海外でSNSの年齢制限が設けられる法令が進んでいることから分かるように、SNSなど、不特定多数や顔の見えない相手とやりとりする上で適切に自分の思いや価値観を伝えることは難しい。だからこそ、自分が感じたことや思ったことを適切な言葉で表現し、協働的に他者とコミュニケーションをとる力が必要になる。このような社会で、生きていく力を育てるために対面で学ぶことのできる学校教育では、主体的・対話的で深い学びが求められている。

2 児童の実態から

本校の教育目標は、「豊かな人間性を培い、自ら進んで取組む、心身ともに健やかな児童の育成」であり、その実現を旨とし「本気全開！柞田っ子」を合言葉に児童の育成に取り組んでいる。また、令和6年度に開催された四国社会科教育研究大会香川県大会を通して社会科の授業を中心に多様な考えに触れ、互いのよさを認め合いながら課題を解決する授業づくりを進めてきた。そこで、自力あるいは他者と協働して、知識を基盤に新しい答えや価値を生み出すことができるよう資質・能力を育成してきた。しかし、全国学力・学習状況調査の結果を見ると、算数科の出題の趣旨として「～その理由を言葉や数を用いて記述できるかをみる」と設定している設問に対しては、4問中3問で全国平均を下回っている。このことから、今後も考えを言語化するために、自分の考えを他者に伝えたり、その実現のために工夫したりする力を、育成する必要がある。それぞれが発表者の思いに耳を傾け、その思いに共感することや、その実現に向けた方法を教師や他の学習者と話し合うことが重要になる。このような学びが、「子どもが輝く学習の創造」に繋がると考える。

3 主体的・対話的で深い学びへ向けた授業改善の視点から

学習指導要領には主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が示されている。主体的に課題を見つけたり、関わったりして学ぶ子を育てるために、各教科の目標に定められた学習活動に重点を置き、単元及び一単位時間における、学びのスタートを大切にしていく。

そこで、本校では、子どもが主体となって試行錯誤を重ねる授業をめざしていく。これからの時代を生きていく子どもたちにとって必要となる自分の思いや考えを根拠と共に伝え、多様な考えに触れながら、互いのよさを認めあい課題解決をしていく力を育てていきたい。本校職員も子どもたちが自ら課題意識をもち、主体的に話し合い、自分の意志で判断しながら納得解を見出していく力が本校の強みであると考えている。こうした力を発揮させる授業を「子どもが輝く授業」と考えた。このような授業改善を行うことで、子どもたちは、自らの力で課題を解決できたことに自信をもち、将来、何か困難なことに出合ったとしても、自分の人生をよりよい方向に切り開いていくことができると確認している。

Ⅲ 研究の視点

視点1

学ぶエネルギーを持続させる問いの成立

視点2

自分の考えをもち、友と語り合い、誰一人取り残さない話し合い

視点3

自走する学習集団をつくるふり返り

視点1 学ぶエネルギーを持続させる問いの成立

問いは、子どもの学びを支えるエネルギーである。車で例えるとガソリンである。この問いが子どもの内面に位置づき、追究意欲が高まることで、45分間の授業をガス欠を起こすことなく完走することができるのである。また、問いは授業での思考や活動にも大きく関与するため、問いづくりは授業の要と言われている。

子どもたちが「なぜ? どうして?」と感じるような問いが授業の中にあると、自然と「分かってほしい! 調べたい!」と思い、ワクワク・ドキドキするような授業を展開することができる。子どもたちの「なぜ?」の予想や考えに違いが生まれると、そこに話し合いをして学ぶ意味が生まれる。他者の考えを知るために、話し合いながらその予想や考えの理由を付け加えていくからである。そういった話し合いを繰り返し、既習事項を関係付けることで、知識が概念化されていくのである。

このような学びのエネルギーを持続させる問いを成立させていきたい。

視点2 全員が自分の考えをもち、友と語り合い、誰一人取り残さない話し合い

本校では、視点1で示した問いを、全員で解決していく話し合いをめざしたい。それぞれ個別に考えるだけでなく、話し合いを通して、子どもたちが学び合い高まり合う学習活動を展開していく。それは、他者との考えの一致により自分の考えに自信を深めることができ、他者との考えの相違により新たな考えを創出することができるからである。

子どもたち全員が主体的に話し合うためには、話し合いの目的を明確にしなければならない。話し合いの目的は、問いの解決である。教師は、すべての学習活動が問いの解決につながっているのか確認する必要がある。そして、その問いに対して考えをつないで深めるために、「話型カード」を活用する。これは、考えの根拠をはっきりさせたり、友だちの考えとの関連を示したりすることに有効である。

また、問いの解決へと導く教師のファシリテーターとしての役割も重要である。まずは誰一人取り残さないために、発言の場を確保する。話し合う前には、論点を整理し何について考えるのかを共通理解する。さらに、子どもたちの発言に対して言い換えたり、問い返したりすることも重要な役割だと考えている。

このようにして誰一人取り残さない話し合いができると考える。

視点3 自走する学習集団をつくるふり返り

本校では、知識や意欲ではなく、学び方をふり返るようにし、学び方を明示的に指導したいと考えている。

そこで、本校のふり返りでは、「分かった(できた)こと」や「感想」ではなく、「どうして分かった(できた)のか」を子どもたちに意識させてきた。そうすることで、見方・考え方を働かすことや協働的に学ぶことで問題を解決できたり理解が深まったりしたことをふり返ることができる。

このようにふり返ることで、次時からの学びに見通しをもって学習に取り組むことができ、自立した学習者を育てることができると思う。

IV 研究の内容

視点1 学ぶエネルギーを持続させる問いの成立

1 問いの配置

本校では、本時の学習のめあてを重要視していることから「学習問題」や「めあて」とおくのではなく、「問い」と表現している。

学ぶエネルギーを持続させるとは、本時、単元のまとめまで子どもの意識が途切れることなく、追究意欲を保ち続けることである。

このような問いを成立させるためには、問いの質や効果を知っておき、単元のどこに配置するかが重要であると考え、教科ごとに分析した。社会科や家庭科では、表①のように問いを配置することが考えられる。算数科では、身近な生活経験から「どんな～が一番速いのだろう？」などと単元を貫く問いをつくることも考えられる。国語科でも、「どの場面が～」や「どんな気持ちだろう？」などと大きな問いが設定されることも想定される。理科では、不思議な現象を見た際に、「なぜこうなるのだろう？」といった単元を貫く問いが成立される。体育科や図工科、音楽科では、「やってみよう」という子どもの心情から「どうすればできるようになるのか？」という問いが成立する。このように教科ごとに単元のどこにどの問いを配置すべきなのかは、異なるため留意が必要である。

それらの問いづくりのきっかけは、既習事項、単元の学習計画、子どものふり返りなどが考えられる。既習事項では、これまで学習と新たな事実とのズレから子どもたちの驚きや葛藤を引き起こすことで問いを成立させることができる。単元の学習計画では、これまでで理解した内容と、まだ分かっていない内容を整理することで、単元の問いと関連させて問いを成立させることができる。子どものふり返りでは、子ども同士の考えのズレから「〇〇さんはなぜこう考えたのかな？」という問いを成立させることができる。

このように問いを単元のどこに位置付けるかで知識を順序よく獲得し、無理なく問題解決を行うことができ、意欲を引き出すことができると考える。

問いの役割	よく使われる場面	問いの種類
関係性	単元を貫く問い	Why How
情報の収集	解決のための問い	When Where Who What How

表①「社会科及び家庭科で見られる問いの配置」

2 問いの成立の実際

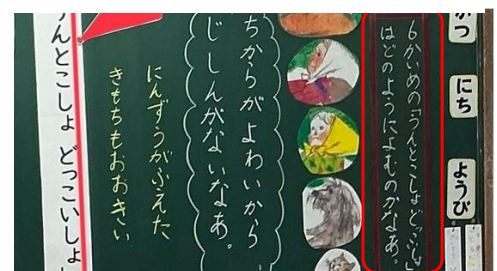
第1学年 国語科 「おおきなかぶ」

これまでに子どもたちは、音読単元の「とんこととん」において、読み取った登場人物の行動や様子から気持ちを読み取り、声の大きさや表情や動作を工夫して音読する学習に取り組んできた。そこで、本実践でも、単元の最初に音読劇をすることを伝え、「登場人物になりきって音読するにはどうすればいいのかな？」と単元を貫く問いを設定した。これまでの学習から音読の工夫の見通しをもち、この問いを解決するために文中に繰り返し出てくる「うんとこしょ どっこいしょ」に着目して学習を進めた。文章に線を引いたり、声の大きさメーターを使ったりしながら、登場人物の気持ちからどのように読めばよいか繰り返し考えてきた（写真②参照）。

そして、本時で子どもたちは、これまでの学習ルーティンから「6かいめの『うんとこしょ どっこいしょ』はどのようによむのかな？」とスムーズに問いを表出することができた（写真①参照）。このように本時の問いが成立したのは、単元の問いが持続していることと、小学校入学してまだ3カ月の1年生にも分かりやすい学習展開を行ってきたからこそである。



写真① 「補助黒板」



写真② 「本時の板書」

視点2 全員が自分の考えをもち、友と語り合い、誰一人取り残さない話し合い

1 自信をもって発言できる「空気」をつくる3Step

(1) 自信をもって発言できるようにするために (Step 1)

まず、話し合う内容を子どもたちに分かりやすいものにする。そのために、話し合う目的を明確にして、問いを解決するために話し合うことを共通理解しておく。子どもたちが多くの考えを表出できる問いほど良質な問いである。話し合う内容が明確になれば、全員が自分の考えをもてるように支援する。例えば、一人学びの時間を確保することやペアで考えを共有することである。このようにすることで自分の意見に自信をもって発言する子どもを増やしていく。そして、話し合いが終わった後は、必ず子どもたちを賞賛する。「全員がしっかり意見をいえましたね。」「しっかり考えた意見がたくさんありました。」「とっても良い話し合いでしたね。」このような言葉を忘れない。

(2) 友だちの発言とつないで発言するために (Step 2)

自信をもって、話し合いをすることができるようになれば、次に、自分の考えと友だちの考えをつないで発言できるようにする。つないで発言するためには、まずは友だちの考えを聴くことが大前提になる。そのために、友だちの意見に対して「つなぎ言葉」を使って発言させていく。つなぎ言葉をいくつか提示しておき、そこから選択させる。そうすると自分の前に発言した児童の意見を聴いておかないと、つなぎ言葉を選択することができない。だから、友だちの意見を聴こうとする子どもを育てることができ、それと同時に、友だちの意見も大切にすることを育てることができる。

<つなぎ言葉>

- ・それと～
- ・同じで～
- ・付け足して～
- ・似ていて～
- ・他に～ など

表② 「つなぎ言葉の例」

※「ちがって～」→「わたしは～」 などのようにマイナスな言葉は使わないように工夫して指導する。マイナスな言葉を積み重ねることは発言したくないと思う子どもを育てる。

(3) 友だちの発言から考えを深めるために (Step 3)

話し合いの中でたくさん意見が出て、友だちの意見を大切に発言ができる。そんな「空気」が教室の中に流れ、「話し合いが楽しい」という子どもがでてくると、そこからその集団の言語活動は進歩する一方である。そこで、多面的に思考を深めた意見を引き出すために、教師の「友だちの考えを聴いてどう思いますか？」という発問から、友だちの発言から深まった考えを発言させていく。このようなことを繰り返すことで、友だちの発言から考えを深める子どもを育てる。

2 話し合いの実際

第6学年 算数科 「場合を順序よく整理して」

本実践では、リレーの走順の並べ方を考える活動を通して、落ちや重なりがないように順序よく整理する方法を見出すことを目標に「落ちや重なりがないように、走る順番を調べるにはどうすればいいのだろう？」という問いのもと、学習をスタートした。既習事項である、先頭を固定や、順序よく、記号化などから全員が自分の考えをもち問題を解くことができた。その後の話し合いでは、図や具体物を使いながら繰り返し説明することで、2走まで固定すると、その後の選択肢が絞られることに気づいていくことができた。他者の考えから自分の考えを深めることができた。そして、2走まで固定して、順序よく考えていくと、樹形図の形にまとめられると考えが収斂した。



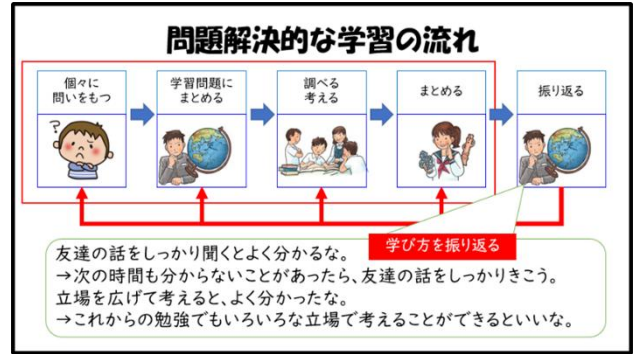
写真③ 「具体物を使って説明する児童」

視点3 自走する学習集団をつくるふり返し

1 発達段階におけるふり返りの目標等

本校では、AAR サイクルの考え方をもとに、知識や意欲ではなく、学び方をふり返るようにし、学ぶ力を育てたいと考えている。AAR サイクルとは、これからの時代に求められる資質・能力を身につけるために効果があると OECD にも評価されている学習サイクルである。このサイクルを繰り返すことで、視点1の問いを解決する際に自ら解決の方法を選択・判断する学習集団をつくることができると考える。

そのふり返しには、メタ認知の能力が大きく関わるため、小学校低学年では、ふり返りの目標を変える必要がある。そのため、小学校低学年、中学年段階では、下記のようにふり返る力の素地を系統的に育てていくよう計画した。



図① 「学び方をふり返る学習の流れ」

学年	ふり返りの目標	教師の発問、行動
低学年	自己の学びをふり返る	今日の勉強で自分はどれくらいがんばれたかな？ だれの発表がすごいと思ったかな？
中学年	どうして分かった(できた)のかをふり返る	今日はどうやったら分かった(できた)かな？ 今日一番納得したポイントは？
高学年	どうして分かった(できた)のかをふり返し →次時から見通しをもつ	問題を解決する際に「今日はどうやったら分かる(できる)かな？」見通しをもつ時間を確保する。

低学年は、自分が今日はどんな学びができたのかをふり返る。例えば、自分自身が勉強にどれくらいがんばったのかを★★☆をぬって表したり、授業の中で「だれの発表がよかったかな？」と発問したりする。

中学年は、自分が今日の学びでどのように分かった(できた)のかをふり返る。例えば、ふり返りの時間に教師が、「どうやったら分かった(できた)のかな？」と発問したり、納得したポイントを表現させたりする。

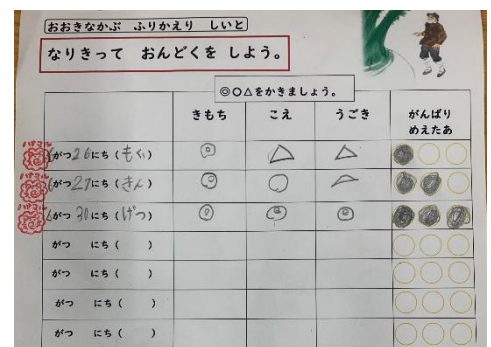
高学年は、ふり返りを次の学びへといかす。例えば、中学年から積み重ねてきた、どうして分かった(できた)のかをふり返し、次の時間の問題解決をする際に「今日はどうやったら分かる(できる)かな？」と見通しをもつ時間をとる。

2 ふり返りの実際

第1学年 国語科 「おおきなかぶ」

本実践では、毎時間登場人物の気持ちや声、動きを具体的に想像して音読できたかどうかを振り返った。気持ち、声、動きの3つの観点で◎、○、△をつけている(写真④参照)。このようなワークシートを使うことで子どもたちは、前回と比較しながら確かに音読が上達していることを実感することができた。

また、今日の自分の学びはどうだったのかを「がんばりめえたあ」の●の数でふり返った。一単位時間の最後にふり返ることで、メタ認知能力を高めて、学び方をふり返る素地をつくっている。



写真④ 「ふりかえり いいと」